

台湾の高校「国文」教科書における台湾文学

— 鄭清文「我要再回来唱歌」を中心に —

松崎 寛子

目次

はじめに

第1節 台湾における高校「国文」教科書の歴史

第2節 新検定制度の開始と「国文」教科書における台湾文学

— 龍騰文化出版社「国文」教科書における鄭清文「我要再回来唱歌」を中心に

第3節 「国文」教室における台湾文学

— 龍騰文化出版社「国文」教科書における鄭清文「我要再回来唱歌」を例に

おわりに

(要約)

台湾の高校における「国文」教科書の編纂が民間の出版社に開放されたのは、1999年のことであった。「国語」を教育する高校の「国文」授業は、生徒の国家・社会意識を形成する役割を担っており、台湾文学の重要な読書市場の一つと言えよう。小論では民主化が進み、新しい「国家」体制を模索していく台湾において、台湾文学が「国文」教科書及び教育現場でどのように教えられているかを考察した。まず、国立編訳館による国定制から、民間出版者による検定制へと移っていく過程を論じた。次に、鄭清文の作品を中心に、教育部の規定、出版社の編者、審査委員、そして教師と、政府・教科書を作る側、教科書を審査する側および教科書を使用する側の、各々の立場の意図を論じ、台湾文学が「国文」教科書においてどのように取捨され、評価され、受容されているかを分析した。以上の報告をふまえて、文学作品に現れた台湾独特のアイデンティティが「国文」教科書の中で如何に受容されていくかを検討した。

はじめに

1996年、現代台湾作家、洪醒夫の作品「散戯」が、台湾の高校「国文」教科書『高級中学国文第四冊』に掲載された。現代台湾作家の作品が初めて台湾の高校「国文」教科書に採用されたのである。同年、初の總統直接選挙で李登輝が当選する。台湾民衆の民主化要求に応じて、政府の民主化政策も本格化する中、高校教科書編纂事業においても、教育部の定める指導要領に基づき国立編訳館が統一して編纂する「統編本」制度（国定制）が改革されて、1999年には複数の民間出版社に教科書の編纂が開放され、教育部の定める指導要領に基づいて複数の民間出版社が教科書を編纂し、国立編訳館が審査する「一綱多本」（検定制）へと移っていく。以後、各社の高校「国文」教科書には、国定制の時に比べて、多くの台湾作家の作品が採用されるようになった。台湾における高校への進学率は、高等専門学校も含めると、男女合わせて1996年には90.70%、2006年には96.23%と非常に高い¹。

藤井省三は、著書『魯迅「故郷」の読書史』（創文社、1997年）において、ベネティクト・アンダーソンとイ・ヨンスクの理論を援用しつつ、20世紀の中国文学が「言語の共有の意識」を「言語共同体の成員」にもたらし、国民国家形成の推進力となった点を論じた。台湾においても中等教育における「国文」は、生徒の国家・社会意識形成に対し大きな影響を与えており、教科書は今や台湾文学にとって重要な読書市場の一つに成りつつあると言えよう。

本稿の目的は、民主化を達成し、新しい「国民国家」形成を模索中の台湾において、台湾文学

が「国文」教科書で、また教育現場でどのように教えられているかを探ることにある。まず、マクロ的な視点から、1996年現代台湾文学作品が初めて高校「国文」教科書に採用されるに至り、1999年「一綱多本」制への移行を経て、2005年に「一綱多本」に適應する指導要領を教育部が公布するまでの、台湾における高校「国文」教科書編纂の移り変わりを分析する。次に、ミクロ的な検証として、2005年台湾全土で最大シェアを誇る龍騰文化出版社に収められた鄭清文「我要再回来唱歌」（以下、「唱歌」と略す）を例に、1999年に初めて民間出版社が編纂した教科書に採用された現代台湾文学作品が、教師用指導書で如何に解釈されているか、そして2005年教育部の指導要領改定後にその解釈がどのように変化したかに注目する。同時に、高校「国文」教師の授業報告に基づき、「国文」教室の現場で台湾作家鄭清文の作品が具体的にどのように教授されているのかを考察する。

1. 「台湾文学」の定義

2005年教育部が改定した指導要領「普通高級中学課程暫行綱要」に定められた「普通高級中学必修科目「国文」課程綱要」の「範文選材與配置」（3）には、「白話文を選ぶにあたって：台湾新文学以降の著名作家、名著を主とし（原住民の作品も含める）、他の近現代華文作家と優秀な翻訳作品も考慮に入れること。古代の白話文に近い文体のものも採用してもよい」と、高校「国文」の指導要領に初めて「台湾文学」という言葉が登場した。そこで本稿で対象とする「台湾文学」とは、「台湾新文学運動以降」の台湾で書かれた「白話文学」を指し、作家の族群は問わない。また、ジャンルは、「国文」教科書で取り上げられている、小説、現代詩、エッセイの三つとする。指導要領改定後、どのような作家、ジャンルの作品が高校「国文」教科書に採用されたかは、後で触れる。

2. 先行研究

台湾の「国文」教科書に関する主要な先行研究には次のものが挙げられる。

- (1) 蘇雅莉『高中国文課程標準與国文課本選文變遷之研究』（台湾・国立政治大学中国文学系碩士論文、2005年）：1952年から1996年までにおける台湾の教育制度の変化と、高校「国文」教科書で採用される作品の変化について、文言文と白話文全てのジャンルを分析した、マクロな視野から論じた研究。また、「白話文学」については「民国期」文学に分類しており、特に「台湾文学」には注目していない。また1999年に提出された論文であるため、2005年度の指導要領改定後の状況については言及していない。
- (2) 顏毓黛『高中国文課程實施現況之調查研究』（台湾・国立成功大学教育研究所碩士論文、1999年）：教師と生徒に対するアンケート調査をもとに、現行の高校「国文」の教授法について考察している。教科書に採用された作品については論じていない。
- (3) 王璧蓮『国中国文教科書中台湾文学作品之變遷及詮釋』（台湾・国立台湾師範学院台湾文学研究所碩士論文、2004年）：高校ではなく、中学の「国文」教科書における台湾文学の作品とその注釈について分析しようとするもの。現行の中学の「国文」教科書が採

用している台湾文学作品は散文が多数を占めていること、「国文」教科書に採用されている台湾籍の作者の数が大陸の作者に比べて少ないこと、教育部の定める「課程標準」が依然として中国意識が強いこと等を批判している。

また、「国文」教科書については取り上げていないが、本稿と関連するテーマを扱っている著書として、林初梅『「郷土」としての台湾—郷土教育の展開にみるアイデンティティの変容』（東信堂、2009年2月）がある。本書は、台湾における小中学生の郷土教育政策との関わりの中で、国民形成の視点から台湾主体の新しい台湾人アイデンティティが形成されつつある状態、すなわち国民国家がまさに生まれようとしている台湾を捉えようとするものである。

第1節 台湾における高校「国文」教科書の歴史

1. 「統編」統一教科書（国定制）の登場—戦後初期から戒厳令施行時期まで

1945年、第二次世界大戦が終結し、台湾は日本の植民地統治から、中華民国へ復帰する。50年にわたる日本統治下の台湾で推進された「国語」は日本語であり、日本統治末期の1942年には台湾人日本語理解者は60%を上回っていた。一方、終戦直後台湾で新しい「国語」、つまり北京語を話す者の人口は1%にも満たなかった。²

こうした状況のなか、台湾省行政長官公署は「台湾接管計画綱要」に依拠して各教育機関を接収管理し、教育政策の重点を、台湾人の日本統治時代に「皇民化」された思想を排除して「祖国化」することに置いた。その方法は学制の改定と日本語にとってかわる「国語」（北京語）教育の推進であった。1946年6月、教育部は祖国化を目指す教育の8方針を発表し、その第一に「国語」の普及をあげたのである。

学制は、1932年に中国大陸で公布、施行されていた「中学課程標準」に基づいて「六・三・三・四」学制とし、中等教育でも「国文」の授業が行われた。1946年、「台湾省国語推行委員会」が設立され、同年「台湾省国語運動綱領六条」が公布される。その内容は以下の通りである。

- 一、台湾語の回復を實行し、方言との比較から国語を学習する。
- 二、国字の読音を重視して、「孔子白」³から「国音」へと代える。
- 三、日本語の表現を完全に取り除き、国音で直接文章を読み、文章の復元を達成する。
- 四、品詞の対照を研究し、言語の内容を充実させて新しい国語を作る。
- 五、注音符号を利用して、民族の意思を疎通させ、中華文化を理解させる。
- 六、学習しようとする気持ちを激励し、教育効果を増進させる。⁴

台湾現代作家、鄭清文は、戦後直後の中学「国文」授業の様子を次のように語っている。

「(中学の時、学校に) 中国大陸から人がやって来ましたが、その中には標準的な中国語を話す人もいれば、何を話しているのかさっぱりわからないような人もいた。当時、私達は日本語で国語の試験を受けたんですよ。例えば、「相談は国語で何と言うか?」という問題が出ました。私は「相談」という日本語は知っていたけど、その中国語は知らなかった。だから隣の奴に聞いたら、「商量」だ」って教えてくれたんです。こんな風に、日本語で問題が

出て、中国語の答えを書かせられた。(中略) 次第に、中国から来た先生が中学で教えるようになって、彼らの中国語は比較的標準的でした。私達はそこでウタヒを学びました。(中略) 当時、多くの先生は資格を持っておらず、ただ教える、といった感じでした。⁵

このように、当時「国文」授業は、北京語習得を主としたものの、「国文」の教育現場では戦後「国語」体制変革の混乱が続いていたことが伺えよう。

1949年、国民党政府は大陸を失って、台湾に移り、台湾を「反共復国基地」として位置づけ、同年5月、「戒厳令」を実施した。このような状況下、政府は1950年6月「戮乱建国教育実施綱要」を、また1952年には「台湾省各級学校加強民族精神教育実施綱要」を公布、教育部は当時の「反共抗俄」という国策に合わせるため、「公民」、「国文」、「歴史」、「地理」の四教科を、民族精神を強化する主要科目と見なし、1952年新しく「中学課程標準」を修正、公布した⁶。そして同年10月、上記四教科の教科書が、教育部「標準本教科書編印委員会(後の国立編訳館)」によって編纂出版された⁷。こうして、その後40年あまりにわたる国定統一教科書、「統編本」が始まったのである。

1966年、中国大陸で文化大革命が勃発すると、国民党政府はこれに対抗して「中華文化復興運動」を推進する。蒋介石は同年10月12日国父生誕日に「死ぬ気で中華文化を守り、死ぬ気で中華民國を守ろう」と号令し、翌年1967年には中華文化復興推行委員会を正式に組織した。一方、政府は1967年「九年義務教育実施綱要」を通過させ、翌年「国民中学暫行課程標準」を公布し、義務教育は正式に九年間に延長された。1971年、教育部は国民中学の第一期卒業生が高校へ入学する⁸に当たり、「高級中学課程標準」を公布した。それは、今までの「国民中学課程」を引き継ぐものであることを強調しつつ、「民族精神教育と民族道徳教育を強化する」、「我が国の固有文化の教材を増加する」という項目を加え、高校「国文」の目標を次のように定めた。

- 一、生徒の白話文で読解及び創作する能力を高める。
- 二、わかりやすい古典を閲読する興味と簡単な文言文で文章を書く能力を養う。
- 三、優美な課外読み物を閲読するように生徒を指導し、彼らが文学作品を鑑賞する興味と能力を促進する。
- 四、固有文化を教え込み、時代思想を啓発し、高尚な人徳を養い、愛国観念を強化し、大同の精神を発揚する。

こうした義務教育の延長に伴い、新たな高校「国文」教科書が必要となったのである。新たに定められた高校「国文」教科書における白話文と文言文の割合は、1年生では4対6、2年生では3対7、3年生では2対8であり、文言文の割合が非常に高い。翌年実際に編纂出版された教科書を見ると、全体の99課のうち、15課ある白話文は孫文、蒋介石、蔣経国等、国民党指導者に関する文章で占められている。また「国文」の授業数は、1年生で週7時間、2、3年生で、理系では週5時間、文系では7時間に増加され、従来的高校における「国文」の授業時数と比べると、最も多い時間数であった。「中華文化復興運動」が進められる中で、「国文」は同運動に対し重要な役割を担っていたのである。

2. 民主化運動の高揚、1996年洪醒夫「散戯」教科書掲載に至るまで

政府は「中華文化復興運動」の下、1973年『国語推行辦法』を公布、公共の場所では「国語」を使うことを規定、1975年『広播電視法』等、1970年代は、日常生活でも方言使用が厳しく規制された時期であった。一方で、1978年台湾は米国と断交するなど、国民党統治体制も揺らぎ始めていた。この時期には所謂「党外」人士と呼ばれる人々が長期戒厳令の不条理を訴え、民主化を要求し、1979年12月、「美麗島」グループのデモ隊と国民党政権側の警察隊が衝突するという、美麗島事件が勃発した。文学においても「郷土文学論争」が起こり、また「台湾本土意識」という問題が出現する。こうした流れの中、教育部は1983年「高級中学課程標準」を修訂、従来通り、中央集権、中華文化、民族精神を主軸とするものの、「課程標準」から「総統指示」の記述を削除し、全面的な反共復興政策の主張を消した。「国文」授業数も、1、2年生は週5時間、3年生は週6時間となった。

1987年、戒厳令が解除されると、民主化要求は益々勢いを増した。こうした状況下、「国文」教育界からは、教科書改訂を求める声が公然と現れ始める。台湾現代詩人で当時高校の「国文」で教鞭を執っていた蕭蕭は、1993年「台湾高中国文教科書的「現代文学」教学内容検討」⁹を雑誌『聯合文学』に掲載した。彼はその文章において、当時の「国文」教科書における白話文の文章を列挙し、これらの作品の半分は、現代文学研究者ですらなじみがないと感じるであろう、と批判し、次のように結んでいる。

「最後に、私が本土文学の重視を強調したいのは台湾で生まれ育ったのに、台湾文学の本当の姿を知らないとは、台湾青年にとって遺憾なことであるからだ。そのため現代文学作品を選ぶに当たり、日本統治時代の台湾文学という重要な球根を無視してはならず、台湾文学の父・頼和以降の多くの傑出した先輩作家の姿を、いかにして若者の胸に留め、彼らの奮闘した足跡を次の世代に伝え、その後について前進するように導くこと、それこそが台湾地区の高校国文教科書の重要な職責ではないだろうか」¹⁰

このような当時の「国文」教科書における過度な「中華民族教育」の重視を批判し、台湾現代文学の採用を望む意見は、他にも発表されている¹¹。当時清華大学文学研究所所長であった陳萬益は、1992年雑誌『国文天地』に「“緊箍咒”を取り除け—国文教育に生きる道を」という論文を発表し、教育部の定める「課程標準」について次のように述べている。

「「課程標準」は、何条かの決まりにすぎないが、しかしすでに国文教育の活力を押さえつけている。数十年来、これらの何条かの文の下、どれだけの党と国家の大老の政治訓示と空虚なお決まりの文章が詰め込まれ、教師に返答の余地を失わせ、生徒の学習の余地を失わせたであろうか。すでに四十年も経っているのに、我々の言語教科書は、まだ党の政戦の影から抜け出すことができないのだ」¹³

こうした「国文」教育界の批判を受けて、1994年、国立編訳館は教科書の改編を行った。そして1996年、国立編訳館から改編出版された『高級中学国文教科書第四冊』第五課に台湾作家洪醒夫の作品「散戯」が掲載されたのである。同教科書の見開きには、次のような「編集大意」が示されている。

- 一、本書は教育部民国七十二（1983）年修訂公布された高級中学国文課程標準に依拠して編纂され、また提出された意見を参酌して改編されたものである。
- 二、本書は合わせて六冊に分かれており、高級中学三学年六学期の授業に使用する。
- 三、本書編集の目標は、学生の閲読及び作文能力を高め、愛国経世の精神を呼び起こし、中華文化を發揚することである。
- 四、本書が選んだ模範文は、思想が純正であり、言葉遣いが優美であり、また時代の潮流に合うものを主としている。（以下略）

洪醒夫は1949年台湾彰化県二林鎮に生まれ、1967年「逆流」を『中華日報』に發表してデビュー、1982年33歳で自動車事故により逝去するまで、小学校で教鞭をとりながら、台湾の農村を背景にした小説を多数發表した。「散戲」は、1978年第三回「聯合報小説獎」で第二位に選ばれた作品である。村々の廟を巡演する「歌仔戲」の劇団の没落の様子を描いたこの作品について、教科書掲載後、多くの高校「国文」教師から、「散戲」で描かれた歌仔戲の没落は「農村文化の終焉の象徴¹⁴」、「伝統文化の没落の象徴¹⁵」であり、「（作者は）伝統文化を勇敢にそして執拗に守ろうとする者へ深い配慮と同情を寄せ、伝統道德觀念の喪失への感傷を表した¹⁶」感動的な作品である、といった意見が寄せられた¹⁷。

1975年、黄春明の作品「魚」が中学「国文」教科書に掲載された際、8月15日付中華日報に、ある一人の中学「国文」教師から、「中学生に与える国家の教科書たるものに、黄春明のような作家が国父孫中山先生、総統蔣中正先生、梁實秋、朱自清、胡適、蔡元培等の現代名作家と名を連ねるなどは、なんとも不可思議なことだ¹⁸」という批判の投稿が寄せられ、物議を醸したことがある¹⁹。一方、1996年洪醒夫「散戲」の掲載に際しては、「国文」教育界からは肯定的な意見が多く寄せられた。国立編訳館『高級中学教師手冊第四冊』（1996年）の第五課「散戲」の「学習指導要旨」は次のように定められている。

- 一、台湾農村社会の変遷の状況を観察し、歌仔戲が次第に没落していく原因の検討を加える。
- 二、伝統文化の中に込められた貴重な財産を見つけ、現在商業文明の華やかさ・利益の誘惑がもたらす悪い影響を考え、我々が対応すべき態度を挙げる。
- 三、常に伝統文化芸術の發展に関心を払い、先祖が堅持してきた道德と理想を深く感じ取り、郷土を熱愛する心を養う。

歌仔戲を伝統文化とし、作品に登場する「秦香蓮」等の演目は「忠孝節義の伝統道德を伝える、農民にとっての教育と信仰の源²⁰」であり、「散戲」は「今日の商業文明によって伝統文化が腐蝕され、昔の道德信仰が物質的享樂に取って代わられる²¹」現象を描いていると解釈することで、「中華文化」、「時代の潮流との符合」という当時の教育部の趣旨に合った教材となりえたのである。また台湾の農村を描いているということで、前掲の台湾本土文学採用を求める声にも答えることのできる作品と見なされたのであろう。

1995年、教育部は社会の変化に合わせて新たに「高級中学課程標準」を修訂し「高級中学国文課程標準」を定めた。その「目標」、「教材編集の要領」の内容には大きな変化はないものの、白話文と文言文の割合が、1年生は4.5対5.5、2年生は3.5対6.5、3年生は2.5対7.5に変更され、従

来の課程基準よりも白話文の割合が5%増えた。

そのころ台湾社会では、民主化運動の波に乗って、1994年民間教育改革団体が1万5千人を動員する「410教育改革デモ²²」を引き起こすなど、教育改革を求める声はますます高まっていた。1997年3月、教育部は高校教科書を検定制に全面的に移行することに同意、1999年には、ついに複数の民間出版社に教科書編纂が開放される「一綱多本」検定制という新しい時代に入るのである。各社の高校「国文」教科書には、洪醒夫の他、鄭清文、黄春明、陳冠学等現代台湾作家のほか、頼和、楊逵、鍾理和等、日本統治期の台湾作家の作品が多く採用された²³。

次節では、民間出版社によって編纂された高校「国文」教科書における台湾文学をめぐる解説が、第一回「一綱多本」（以下、「第一期検定教科書」とする）から、「普通高級中学課程暫行綱要」（2004年発布、2005年修正発布）へと移行した後（以下「第二期検定教科書」とする）にどのように変化したか、龍騰文化出版社版高校「国文」教科書掲載の鄭清文「我要再回来唱歌」（以下「唱歌」と略す）を例に比較検討する。

第2節 新検定制の開始と「国文」教科書における台湾文学

一龍騰文化出版社「国文」教科書における鄭清文「我要再回来唱歌」を中心に

1. 鄭清文「我要再回来唱歌」について

鄭清文は1932年台湾桃園県下埔子生まれ、1958年「寂寞的心」を『聯合副刊』に発表してデビューする。日本でも『広辞苑』第六版（2008）が「ていせいぶん【鄭清文】」の項目で、「台湾の作家。農村と都市のさまざまな人生を描く。作「三本足の馬」。」と記している。鄭清文は日本統治期すなわち日本語国語体制下で小学校教育を終え、国民党統治期すなわち北京語国語体制下で中等教育から大学教育を受け、銀行員として勤務するかたわら、作家活動を行ってきた。

短編小説「唱歌」は、1979年雑誌『明道文芸』に発表された。登場人物は、台北で共働きをしている正宏とその妻彩鳳、幼稚園に通う5歳の娘圓圓、そして孫娘圓圓の面倒を見るために農村から出てきた婆婆である。婆婆は昔、保守的な観念を持った舅姑に歌を歌うことを禁じられたため、歌を忘れていたが、孫との交流の中で次第に歌を歌い始める。最後に農村へ帰る婆婆は別れ際孫娘に次のように約束する。「おばあちゃんはまた歌を歌いに戻ってくるよ。おばあちゃんは新しい歌も覚えてくるけど、それよりも昔歌っていた古い歌をしっかりと歌えるようにするからね」。歌をテーマとした孫娘と祖母の心温まる交流を、嫁である彩鳳の視点から描いている。

婆婆が孫娘圓圓にせがまれて歌うことで思い出す台湾語の歌とは、日本統治時代から戦後にかけての台湾民衆の苦しい心境を歌った曲として愛好された「雨夜花」²⁴である。「雨夜花」は鄧雨賢（1906年～1944年）作曲、周添旺（1910年～1988年）作詞、1934年日本統治下の台湾で発表された。もともと花街の女性の心情を歌った台湾語歌謡曲であったが、1941年、「誉れの軍夫」という日本語時局歌に改変される。しかし、簡上仁（1979）は、日本統治時代、抑圧された生活の中で、「多くの古い歌謡は、風景、恋慕の情、女性の心情についての描写の中に、当時の台湾同胞の、抑圧の下で異民族統治に対抗する心情がほのめかされている」と述べ、「雨夜花」が「誉

れの軍夫」という軍歌に書き換えられても、台湾民衆の民族意識が屈することはなかった、と強調している²⁵。また杜文清(1993)は、「雨夜花」等台湾歌謡を歌うことで、台湾民衆は「日本人への不満を吐露し、悲哀の中にも台湾人の尊厳を昂然と保ってきた」と述べている²⁶。また、陳芳明は著書『謝雪紅評伝』(1991)の副題に「落土不凋的雨夜花」と「雨夜花」の歌詞を使用し、その序章の最後を、「彼女(謝雪紅)は「土に落ちてでも枯れない雨夜花」として語りつがれるであろう」と結んでいる。その日本語訳版では、「土に落ちてでも枯れないとは、彼女は死んでも、台湾のために尽くしたその献身的な精神や功績が永遠に台湾の歴史と人々の心の中に生き続けるということの比喩」と解説されている²⁷。このように、「雨夜花」は、女性の悲劇を歌った歌から、台湾の歴史意識を表す歌へと発展していった。

鄭が短編小説「唱歌」を発表した1979年は、高雄で美麗島事件が勃発したことに代表されるように、民主化の気運が高まっていた時期であった。若林正文(2001)によれば、台湾の民主化は、60年代に始まった高度経済成長に伴う教育程度の底上げによる「中智階級」の台頭が関係する。「中智階級」とは1970年初頭に本省人知識人である張俊宏が『大学雑誌』で提起した言葉であり、「国語を話す高学歴の本省人」を意味する。彼らは「国語」への言語的同化を通じて、権力の核心に近い地位を得ながらも、戒厳令や言論の自由の抑圧に不満を抱いていた²⁸。「国語」を身につけ、「国語」で小説を書いた鄭清文も、「中智階級」の一人と言えよう。また、1978年1月30日から9月12日にかけて、全26回に渡り、「台湾民族歌謡作家列伝」が『聯合報副刊』に連載される等、それまで軽視されてきた台湾民謡の価値を見直そうという動きも出始める。「雨夜花」は台湾民主化運動のシンボリックな歌謡であり、鄭がこの歌をテーマとした短編小説「唱歌」に彼の台湾意識を託そうとしていたことが想像できよう。

2. 第一期検定教科書(1999年以後)における鄭清文「唱歌」

1999年に教科書編纂が開放された直後に出版された龍騰文化出版社の高校「国文」教科書は、教材の「唱歌」をどのように位置づけているのだろうか。

龍騰文化出版社教科書『高級中学国文』(2000)は各冊の3頁目にある「編集大意」に、「本教科書は1995年教育部が修正、発布した「高級中学国文科課程標準」に基づいて編纂したものである」と記している。編者は台湾大学中文系教授何寄澎、清華大学中文系教授呂正恵、台湾大学中文系副教授李隆猷・魏岫明、政治大学中文系副教授鄭文恵で、鄭清文「唱歌」を2年生後期用の『国文(四)』第12課に収録している。『国文(四)』は、他に胡適、楊牧、林文月、呉晟、モーナノン5名の現代作家と、11名の文語作品を収録、合計14課から構成されている。

(1) 教科書に設定された「学習重点」と「問題」

『国文(四)』第12課「唱歌」はまず次のような「学習重点」を掲げている。

- 一、本文が描写する肉親の情を理解する。
- 二、婆婆の老いても益々強くなる学習精神を理解する。
- 三、婆婆が古い歌を懐かしむだけでなく、新しい歌も覚えようとする寓意を読み取る。

また、同課の「問題と討論」は「婆婆が(台北を)発つ際、彼女は又戻ってくる、新しい歌を

覚え、更には古い歌はもっと上手に歌えるようにする、と言った。婆婆のこの決心の含意を説明しなさい」という設問を配置している。更に「課外学習」を設定、「楊歩偉という一人の女性の自伝の、婚約と婚約解消に関わる部分を読み、女性が旧社会の習俗を突破する際に遭遇した困難を更に理解しよう。」と呼びかけている。以上のことから、龍騰教科書は「唱歌」を、旧社会によって抑圧されていた女性が、年老いた現在、それを乗り越え、学習精神を発奮させ、過去に捉われず新しいことに立ち向かっていく、というテーマを家族愛と共に語る作品として、位置づけたものと読み取れよう。

（２）教師用指導書

龍騰文化出版『国文（四）教学手冊（指導書）[下]』は教材「唱歌」の「指導の手引き」を収録している。まず「学習指導要旨」は、「本小説は伝統的美徳に溢れているが、同時におばあさんの学習精神をも褒め称えている。授業では、以下の重点を正しく理解するのがよい。一、肉親の情（以下略）、二、婆婆の学習精神（以下略）、三、昔を懐かしむだけでなく、前向きであること（以下略）」と指摘する。上述の教科書の学習重点は、これに対応しているのであろう。教科書が、伝統的美徳を大切にしながらも、前向きに新しいことを学んでいく精神を生徒に伝えようと意図している点が理解できよう。

次に、「解説」は「本小説は台湾の旧社会及びおばあさんの過去の生活を描いており、郷土文学と言う事ができよう。郷土文学の観点から見ると、本編はまた明らかにたいへん特殊である。本編は決してひたすら昔の郷土を称え、郷土の全てが素晴らしいと考えているのではない。なぜならその社会において、女性は古い観念の制限を受けてきたため、自分の興味を十分に表現することができなかったからだ。しかし、おばあさんの過去はやはり幸福なものであった。なぜなら夫は彼女を理解していたからだ。彼女は過去、夫と生活を共にした日々を懐かしんではいるが、同時に現在と未来にも進んで向き合い、新しい歌を覚えたいと思うのだ。このことは、以下のことを暗示しているに違いない。健康的な精神構造は、過去と未来の双方を配慮し、その中間でバランスを取ろうとするということ。このような心理は、私たちが深く考えるに値する。」と述べている。つまり、「台湾意識」には直接触れておらず、極めて健康的な「郷土文学」として「唱歌」を解釈しているのである。

また、指導書は教科書の「課外学習」に設定された楊歩偉の作品「婚約から婚約解消まで」を掲載している。この作品は一人の外省人女性の自伝であり、彼女は伝統的観念を持つ祖母の意思によって、生まれる前から婚約者が決められていた。しかし革命思想を持つ祖父と父親の影響から、国民党の前身である「同盟会」に参加し、幼少の頃から祖父や父親から憲法や人権について啓蒙されていた彼女は、自分自身で物事を決める権利を持つことに目覚め、それこそが中国数千年来の大きな革命の一部分であったのだと後に回想するのである。指導書は次のように解説している。

「中国の伝統社会において、子が生まれた直後、さらにはまだ生まれる前から、両親や祖父母によって既に婚約がなされていた。現代社会に入ると、若者は年長者による取り決め方式の結婚に反対するため、一定の期間抗争を行い、ついに自分で配偶者を選ぶ自主権を手

入れたのである。この過程において、女性が遭遇した困難は男性よりも大きかった。楊歩偉は思想の開けた祖父の後押しにより、比較的順調に祖母が彼女の誕生前から既に決めていた婚約を取り消すことができた。しかし、彼女の婚約解消の過程から、女性が旧社会から自分の権利を手に入れることが、やはりたしかに大きな困難であったことが見て取れるであろう」。

ここでも、女性が伝統的旧社会のしがらみに立ち向かう精神が強調されているのは明らかである。更に、楊歩偉が、旧社会から自己の権利を手に入れた過程で、「国民革命」の思想が大きな要因として働いたと述べていることにも注目すべきであろう。

(3) 同教科書における他の台湾文学作品の解釈—呉晟「蕃蕃地図」をめぐる

龍騰文化出版社版教科書の指導書における「唱歌」の解釈は、そのまま出版社側の意図として理解してよいのだろうか。この問題について考察するため、同じく同社版教科書に収録されている呉晟「蕃蕃地図」の解釈をめぐる批評を分析していきたい。

林翠真是、高校「国文」教科書において台湾文学が採用されてはいるものの、台湾の歴史には触れずに解釈されていると批判し、龍騰文化出版『国文(四)』(2000)第13課「現代詩選(二)」を例に挙げている²⁹。同書第13課では、呉晟「蕃蕃地図」及びモーナノン「名前を返せ(還我們的姓名)」の二篇が採用され、二篇の詩の本文の前には以下のような「題解(解説)」が置かれている。

「現代詩は、題材が多様で、スタイルも変化に富んでおり、その中には農村と自然環境、民衆生活への配慮を主とし、言葉が素朴で自然である作品があり、一般的にこのような詩作品を「郷土詩」と言い、本課が選んだ二篇もそうである。」

林は、このような解釈は郷土詩をロマン・ノスタルジア化させる傾向があり、こうした定義は郷土詩があたかも平和的であるかのように飾りつくろった言い方だ、と指摘している。例えば、「蕃蕃地図」には圧殺されかけた台湾の歴史が、内緒話という方式によって代々伝承されてきたという含意が本来こめられている、と林は主張する。以下、「蕃蕃地図」の引用である。

「(中略) 父さんがじいさんから受け継いだ朴訥とした口ぶり

それはまるでじいさんが曾じいさんから
 黙々と伝えられた分に安んぜよという訓戒のよう
 言うのだ! 何万遍でも言うのだ
 この一枚のさつまいもの地図の
 多難な歴史を記録するのだ
 言い出そうともせず
 この地図との血縁関係を
 切断しようとさえする人もいるが、
 子よ! お前たちは忘れてはならない
 父さんがじいさんから受け継いだばかりでかい足跡を
 まるでじいさんが曾じいさんから

一歩一歩踏みしめてきた苦難のように」

林は、「蕃薯地図」という詩が台湾の歴史の苦難の足跡を表現しているにもかかわらず、教科書は「この詩のテーマ「蕃薯地図」は一種の比喩であり、台湾の農村を指す」と解釈し、「蕃薯地図」が喩えているのは「台湾の歴史」ではなく「台湾の農村」であると、本来の作者の意図を歪めていると批判している。また林は、教科書が「子よ！ お前たちは忘れてはならない」という句を、「この言葉は、子に向かって話しているだけでなく、全社会の人に向かって話そうとしているのである。我々は忘れてはならない、農民が代々受け継いできた、黙々とした、苦難に満ちた働きがなかったら、この社会はないということを」と解釈した上で、この詩は「農民を称える詩である」と説明しているとも指摘している。このような教科書の解釈は、歴史観が欠如しており、批判を排除しており、詩に含まれた濃厚な台湾意識を消してしまっている、と林は批判したのである³⁰。

確かに、台湾語で「サツマイモ」を表す「蕃薯 (han-chi) 仔 (a)」³¹は台湾における本省人の比喩、「サトイモ」を表す「芋仔 (oo-a)」³²は外省人の比喩としても使われている。もっとも龍騰文化出版社教科書の「蕃薯地図」の「題解」も、「現在においても蕃薯を台湾にたとえる人もいる」と述べており、詩本来の台湾意識を全く消してしまっているという、林の教科書出版社批判はすべて妥当とは言えないであろう。

2002年10月12日、龍騰文化出版社は同社が開催した「作家身影」シリーズ講座の一貫として、呂正恵を司会進行役として、呉晟を講演会に招待している³³。そこで呉は「「蕃薯地図」は全ての台湾社会の特殊な時空背景の下、長年の思考を経て形成された一篇」と述べた上で、「「蕃薯地図」が指しているのは、台湾の地図であり、私は歴史のある、そして未来もある、つまり過去、現在、未来を融合したこのような心情を以って描写しました。それはまるで私の子供を教え導くように、我々の次世代を教え導く気持ちなのです。我々の若者が、このような台湾の歴史の情感を持ち、台湾に対する思いがいつまでも続き、我々の次世代にまで引き継がれていくことを望んでいるのです」と詩「蕃薯地図」に込めた台湾意識について語っている³⁴。

また、龍騰文化出版社が編集している刊行物『国文新天地』第2期には、林麗雲（国立台湾師範大学附属高級中学国文教師）「土地の呼びかけ—蕃薯地図の鑑賞と分析（土地的呼喚—「蕃薯地図」賞析）」が掲載されている。その一節「主題と内容の検討（主題内容的探討）」は、この詩にはいくつかのテーマがあり、それは「1. 農民が土地に対して抱く愛をもって、台湾意識を伝える、2. 「蕃薯地図」は台湾国家の存在の事実を明示している、3. 歴史を伝承する使命を担っている、4. 祖先が苦勞して田畑を耕してきたことに感謝し、台湾の命運に感慨を覚える」ことである、と述べている。

龍騰文化出版社が主催する講演会において、作者自身が教科書収録の作品中の台湾意識について述べ、その講演録や、現役の高校「国文」教師による台湾意識を主題とする解釈を、出版社自身の編集する刊行物に掲載している点を見ると、教科書における解釈＝出版社の恣意的なもの、という批判は、少なくとも龍騰文化出版社の教科書においては、一概には成り立たないであろう。

(4) 指導要領の規定

ここで、教育部が1995年に発布した「高級中学国文課程標準」を見てみよう。まず「目標」第三項に、「倫理道德の観念と愛国、社会改善の精神を養う」とある。また、「教育綱要」第五項では、「教材を選ぶ基準」は「(一) 思想が純粹であり、人生の意義を教え導くに足り、国民道德者を育てる。(二) 趣旨が明確であり、民族意識を喚起させるに足り、国家政策者に協力する。(三) 構想が深奥であり、中華文化を体得するに足り、民族的自負を持つ者を形成する。」ものであると定められている。

以上の項目から、龍騰文化出版社側は、当時の教育部の意向に沿うため、鄭清文「唱歌」や吳晟「蕃薯地図」が反映する台湾の時代背景についての詳しい説明を省略したと見ることができよう。

教科書は編纂が民間出版社に開放されたとは言え、国立編訳館の「審査制度」を通過しなくてはならず、そのためには教育部1995年公布の「高級中学国文課程標準」に依拠しなくてはならない。1995年「高級中学国文課程標準」は、かつての国定教科書の時代に制定されたものである。このような状況に対して、1999年雑誌『国文天地』に載せられた4名の高校「国文」教師による座談会では、各教師から「一綱多本」とは言え、「多本」の部分だけが新しく、「綱」は依然古いままである³⁵⁾という指摘や、「(教科書の) 品質が保障されるためにも、審査は必要だ。しかし、現在の指導要領において、教科書に対する制限は確かに多すぎる。そのため文章の選定に新しさが見られる以外は、各出版社はより新しい突破口を欠いている。「開放」された教材と言いながら、「半開放」に過ぎない³⁶⁾。」という批判が出た。

こうした旧「綱」新「本」という状況に対応するため、教育部は「普通高級中学課程暫行綱要」を2004年に発布、2005年に修正発布したのである。

3. 第二期検定教科書における鄭清文「唱歌」

(1) 2005年「普通高級中学課程暫行綱要」

2005年に修訂された「普通高級中学課程暫行綱要」のうち、「普通高級中学必修科目「国文」課程綱要」は以下のような「目標」を掲げている。

- 一、白話文で閲読、鑑賞、作文する能力を高め、口語の表現と応用に熟練する。
- 二、文言文とわかりやすい古典を閲読する興味を養い、伝統文化を研究する能力を高める。
- 三、文化水準の高い教材を読ませ、社会倫理の意識と世を治め、人を愛する心を育てる。
- 四、質の高い課外読み物を読み、文芸を鑑賞し創作する能力を高め、生活の視野を広げ、人文への深い関心を強化する。
- 五、言語教育を通して、当代の生存環境に関心を持ち、多元文化を尊重する現代国民を育てる。

このように、従来の指導要領「国文課程綱要」の目標と比べると、中華民族意識を高揚させる項目は消え、現代民主社会に生きる青年を育てることに重点を置いていることがわかる。

次に、教材を選ぶ基準を見ると、特定の党や中華民族教育に関わる表現は一切使っていない。

そして白話文を選ぶに当たっては、「台湾新文学以降の著名作家、名著を主とし（原住民の作品も含める）、他の近現代華文作家と優秀な翻訳作品も考慮に入れること。古代の白話文に近い文体のものも採用してもよい。」と述べている。また、白話文と文言文の割合は、1年生は7対3、2年生は5.5対4.5、3年生は5対5として、白話文の割合を大幅に増やしている³⁷。

（2）第二期検定教科書（2007年以後）—龍騰文化出版社の場合

2007年龍騰文化出版社が2005年「綱要」に依拠して編纂出版した教科書『普通高級中学国文』の編者は第一期と変わらないが、編纂顧問には玄奘大学講座教授羅宗濤、銘伝大学応用中文系教授蔡信發、作家簡嬪、国立台湾大学中文系教授鄭毓瑜、成功大学中文系教授陳昌明の他、鄭清文自身も選出されている。また、上述した、呉晟の「蕃藪地図」は、第二期検定教科書からは除外されている。龍騰文化出版社の教科書が収録する現代文学作品の変化を見てみると、第一期検定教科書、第二期検定教科書両方に収録されている作品は、鄭清文の「唱歌」の他、琪君「一對金手鐲」、阿盛「火車與稻田」、徐志摩「再別康橋」、鄭愁予「錯誤」、梁實秋「下棋」、蕭紅「呼蘭花傳選」、豊子愷「漸」、魯迅「風箏」である。第一期と第二期両方に収録されているが、収録される作品が変わった作者は、周作人（「故郷の野菜」→「蒼蠅」）、簡嬪（「碗公花、竹枝詞」→「竈」）、蔣勳（「我與書画的縁分」→「大学」）、黄春明（「魚」→「溺死一隻老猫」）、胡適（「容忍與自由」→「秘魔崖月夜」）、楊牧（「野桜」→「十一月的白芒花」）、林文月（「蘿蔔糕」→「翡冷翠在下雨」）、呉晟（「蕃藪地図」→「堤岸」）、余光中（「聽聽那冷雨」→「剪掉散文的辮子」）、朱光潜（「談擺脱」→「當局者迷・傍觀者清」）である。第一期には収録されたが、第二期には収録されていない作者は、鍾理和、呉魯芹、莫那能（モーナノン）、司馬中原、張継高、馮至、方思、陳列、頼和、沈從文である。第二期に新しく登場した作品は、陳之藩「寂寞的書廊」、林海音「爸爸的花兒落了」、張曉風「玉想」、何其芳「秋天」、戴望舒「獄中題壁」、亜米契斯（エドモンド・デ・アミーチス）「爸爸の看護者」、林亨泰「風景 NO.1」、朱自清「荷塘月色」、白先勇「少小離家老大回」、呉濁流「先生媽」、陳義芝「燈下削筆」、劉克襄「檜木林之歌」、張愛玲「金鎖記」、林凌「不繫之舟」、林徽音「無題」、孫大川「母親的歷史、歴史的母親」である。原住民作家の作品が、モーナノンの詩から孫大川のエッセイになり、台湾日本語作家の作品が頼和から呉濁流のものになった。そして、過去に大陸で活躍し、戦後国民党政府と共に台湾へ渡ってきた作家よりも、近現代の台湾文壇を担ってきた作家や、若手作家、台湾において多くの読者層を持つ作家の作品、また中華人民共和国で受け入れられてきた作家や海外作家の作品がより多く採用されていることがわかる。

（3）第二期検定教科書（2007年以後）における鄭清文「唱歌」

それでは、新しい「綱要」の制定によって、鄭清文「唱歌」の教授法はどのように変化したか。2007年龍騰文化出版社が2005年「綱要」に依拠して編纂出版した教科書『普通高級中学国文①』は1年生の前期で教える第十課に鄭清文「唱歌」を掲載している。

教科書で設定されている「学習重点」と「問題」、及び教師用指導書『教師手冊』で書かれた「学習指導要旨」と「解説」の内容は、第一期のそれと大差はない。しかし、「雨夜花」についての注釈が、第一期の「閩南語の歌。雨に打たれて落ちる花を女性の命運の悲哀に例えている」

というものから、「閩南語の古い流行歌。鄭雨賢作曲、周添旺作詞、歌詞は雨に打たれて落ちる花を女性の命運の悲哀に例えている」とより詳細、具体的になり、周添旺直筆の「雨夜花」詞の原稿の写真も図版として掲載されている。また、「課外学習」は、「国民革命」と女性の自立を描いた作品を削除し、かわって林海音の「母親の秘密」という、作者の母親の中国大陸から台湾に渡るまでの生涯を書いたエッセイを採用している。

そして第二期では、「教科書本文の指導」という、授業の最初に教師が生徒にいくつかの問題提起をする項目が設けられている点も注目に値する。設問は以下の通りである。

- ・本文では「歌を歌うこと」という行為を通して何を伝えようとしたか。
- ・文中で婆婆が歌う歌は「雨夜花」であるが、この歌がここで表す意義を分析しなさい。
- ・婆婆が年老いてからまた歌を歌おうとした意義は何か。

このような問題提起を掲載することによって、教科書は教師の指導及び生徒の学習により大きな空間を与えたのである。

それでは、新「綱」と新「本」の両者揃ったところで、実際の教育現場では鄭清文「唱歌」をどのように教えているのだろうか、この問題を次節で検討したい。

第3節 「国文」教室における台湾文学

一龍騰文化出版社「国文」教科書における鄭清文「我要再回来唱歌」を例に

2007年高雄女子高級中学の「国文」教師、楊子霽は「我要再回来唱歌」の授業報告³⁸を発表した。楊は教科書に書いてある作者紹介に沿って鄭清文を紹介し、生徒に教科書本文を読ませた後、次のような問題を挙げて、生徒同士の討論を開始したという。

- 一、なぜ舅姑は婆婆の歌を歌う行為を抑圧したのか。
- 二、舅姑が死んだ後、婆婆はどうして自分自身で歌を歌うという趣味を取り戻さず、嫁に合唱団に連れられていくことで再び歌うようになったのか。
- 三、「雨夜花」という歌はどのような歌か。
- 四、婆婆はどうして「雨夜花」を歌った時、緊張したのか。

これらの問題について討論させた後、楊は「唱歌」における時代観念、背景についての知識を補足し、「雨夜花」の歌を取り巻く状況を紹介、CDで同歌を流して、登場人物の心情に注意するように生徒を指導した。そして次に以下のような問題提起をし、再び生徒たちに討論、発言をさせた。

- 一、なぜ本文では対話の前に「誰が～と言った」がないのか。
- 二、小説はなぜ対話によって終わっているのか。
- 三、人名はなぜ皆「俗っぽい」のか。
- 四、おばあさんは都市が嫌いで農村が好きである。しかし歌を歌う才能は都市で発掘され、農村ではその才能は抑圧されていた。その意味は何であろうか。
- 五、なぜ鄭清文は男性作家でありながら、年老いた女性の物語を書いたのか。

六、なぜ婆婆は新しい歌だけでなく、古い歌も歌おうとしたのか。この歌を歌うという行為は何を象徴しているだろうか。

七、なぜ最後に「もし運がよければ、古い歌の楽譜を見つけられるかもしれない」と言ったのか。

このような問題提起に対して、生徒は活発に意見を交わしたというが、実際の具体的な内容は、明記はされていない。例えば、楊が最も興味深く思ったのは、ある生徒の「登場人物の名前がこのように農村風だと、その真実味が増し、しかも婆婆に名前がないのに対して、「彩鳳」は現代女性で、より多くの自由を持っているので「彩色の鳳凰」なのであり、圓圓については、彼女が婆婆を台北に来させ、欠けたものを丸く収めた重要な役なのでその意味で「圓圓」なのです。「正宏」は、一般的な品行方正な男性の役なので、「正宏」と呼ばれるのです。」という意見であったが、それに対する他の生徒の反応やその後の議論は記されていない。楊の報告によると、授業は活発に行われ、新しい意見が次々と出たという。また生徒たちは鄭清文のテキストに興味深く読み、授業の最後に、学校の図書館に鄭清文の本は何冊あるかと教師に質問する生徒もいたという。

この報告書からは、現場の教室では作家・作品の奥義にどこまで突っ込んだやりとりが教師と生徒の間で行われているのか、わからないのは残念であるが、これにより、教師が教科書をもとに自由に問題を提起し、それに対して生徒が自由に討論、発言するという、1980年代から教育現場で求められていた授業スタイルが実現しつつあることが伺えよう。

おわりに

本稿では、戦後台湾の高校「国文」教科書の歴史を追いながら、高校「国文」教科書編修出版の変遷をたどり、台湾文学が教科書に採用され、「国文」教室で受け入れられていく過程を考察した。第1節では、戦後初期から戒厳令期にかけて、国文教科書は国民党政府の「反共」政策の下「中華民族の文化」を守る重要な役割を果たし、その基本となるのが教育部の定める指導要領「高校課程標準」であることを示した。その上で、台湾民主化の動きに従い、次第に教育現場から台湾本土文学の採用と教師の自由を求める声が高まり、1999年国定教科書から洪醒夫「散戯」が掲載されるに至ったことを指摘した。第2節では、民間出版社の教科書編纂開放後も、その編纂の基準となる指導要領「綱要」は依然国民党の思想が残るものであり、教科書編纂に制限があったものの、2005年には民主化社会に見合った新しい「暫行綱要」が公布され、教科書編纂及び教育現場に自由な空間を与えられたことを示した。第3節では、実際の高校「国文」教師の報告をもとに、「国文」教室の現場の様子を分析した。

しかし、余光中らが組織する「国文教育緊急救助連盟（抢救国文連盟）」は、新しい「綱要」は民族文化に深い損害を与えるとして、文言文を高校「国文」教科書から減らすことに強く反対している³⁹。また、現台北市長郝龍斌は、台北市内では教科書を「一綱多本」から「一綱一本」にする意向を表明している⁴⁰。2009年9月10日に発足した呉敦義行政院長率いる新行政院（日本

の内閣に相当)の教育部長には、呉清基が任命された。呉清基は、2002年から2008年まで台北市政府教育局局長を務め、2008年から2009年には台北市副市長を務め、台北市の教科書「一綱一本」制を押し進めた中心人物でもある。呉が教育部長着任後、「一綱一本」制を台湾全土で押し進めるか、物議をかもしている。陳水扁政権時代、2004年から2008年まで教育部長を務めた杜正勝は、1995年から中央政府が積極的に進めた「認識台湾」教科書編纂の過程で、「認識台湾 社会篇」の「教科書編纂委員会」の主任委員を務めた経験があり、教育における台湾人アイデンティティの関わりを深めることに積極的であった⁴¹。これに対して、2008年に政権が民進党から国民党に交代したことにより、教育部の方針も徐々に転換しているとも考えられよう。

2008年1月、教育部は「新修訂普通高級中学課程綱要」を公布した⁴²。しかし、教育部及び各界知識人によって形成された「普通高級中学課程發展委員会」で行われた討論の結果、「国文と歴史については引き続き話し合いが必要」という決議に至り、正式な公布、実施は2010年度に延期されることになった⁴³。2008年の「新修訂普通高級中学課程綱要」で定められた「国文課程綱要」が2005年「綱要」と異なる点は、「教材を選ぶ基準」の欄が、従来の規定に加えて、「選択した文章は言葉が読みやすく、文学性を備え、現代のテーマ(海洋文化、ジェンダー、人権・法秩序、生命教育、環境保護教育、永続する発展、多元文化など)を考慮していること」という項目を挙げていること、また、白話文だけでなく、文言文の文章選択の際の参考作品に、四篇の台湾を題材とした作品を加え、四十篇の参考作品の五分之一を占める八篇が台湾を題材とした作品になるようにしたことである⁴⁴。2008年「新修訂普通高級中学課程綱要」制定に当たって教育部から発表された文章「普通高級中学国文課綱修訂理念及特色」には、以下のような理念が記されている。

「実際、晚清から民国にかけての少数の人々を除いて、我々が熟知している「文言文」の作者も、自分が「中国」人であるとは思っていない!日本の明治天皇時代の乃木希典將軍は日露戦争で軍を率いて遼東を攻撃した際、規則に完全に合った「漢詩」を作ったが、そのことによって彼は「日本人」ではないとは言えないのである。この「漢文」系統を用い、「詩詞」の規則に従って作品を作ることが、彼らが政治的に「一国」に帰属することを証明するものではない。それは世界中の国々で「英語」を使っている国が、「英国人」であったり、政治的に「英国」であったりするのではないのと同じである。(中略)よって、これらの「漢文」系統で書かれた「文言文」と古典「詩詞」が我々の生徒の学習教材となるのは、もちろんそれらがある種の「国家アイデンティティ」を代表するからではなく、それらがユニバーサルな「文化価値」を反映し、深い「人としての経験」の認識と、優美な文字を通して達成し卓越した「文学表現」を表しているからである。同じように、我々が指導要領で、白話文は「台湾新文学以降の著名作家、名著を主とする」と定めたほか、「他の近現代華文作家と優秀な翻訳作品」でもよい、と定めたのは、「翻訳作品」はもちろんその原作者は一般にわが国の作者ではないが、当然我々も生徒に「外国にアイデンティティを持」たせるためではなく、これらの作品の文化・文学的価値、豊かで多元的な人間性の認識や生命の知恵のため「翻訳作品」を選択するのである」⁴⁵。

「国文」が「特定」の「国家アイデンティティ」を要請するものではないことを、教育部の文書が始めて明文化したのである。

また、新しい「綱要」に反対する何寄澎と、新しい「綱要」制定委員会の招集人であり、教科書審査に関わっている柯慶明とは筆戦を交わしている⁴⁶。柯慶明と意見を対峙する立場にある何寄澎は龍騰文化出版社の高校「国文」教科書の編纂委員を務める。一方、南一書局の高校「国文」教科書の編纂委員には、台湾語で現代詩を創作し、「台湾ペンクラブ」の発起人の一人であり、台北教育大学台湾文学研究所の副教授を務める向陽が、メンバーの一人となっている。このように、編纂委員がどのような主張を持つかによって、各出版社の特色が異なることは十分に考えられる。国立編訳館の藍順徳（2003）は、教科書の編纂メンバーと審査メンバーの立場が対立しており、お互いに信頼不足であり、相互の知識理念やイデオロギーが、教科書の内容の決定に影響を与えていることを指摘している⁴⁷。また、藍は同論文において、教科書市場の特性についても言及している。すなわち、教科書業者が市場の占有率を争うあまり、業者は教科書が審査に通過するか、教師達に選ばれるかどうかという点のみを重視し、編纂者の専門的な決定を無視していること、また教科書の開放に伴って、教科書の価格が国定制の時のものよりも高くなっていることなどである⁴⁸。台湾のビジネス紙『財訊』でも、教科書の開放によって新たに出現した「教科書市場」という市場をどの出版社が制するか、という記事を掲載しており⁴⁹、教科書市場が特殊なビジネスの問題となっている点も無視できないであろう。

民主化を達成した台湾において、そして政権が交代した台湾において、今後「国文」教科書はどのように変化していくのか。教科書を作る側、教科書を審査する側、教科書を使用する側の意図が複雑に入り交じる中で、台湾文学を「国文」教室で教える意義はどのように評価され、台湾作家が作品に託した台湾アイデンティティはどのように解釈されていくのか。それは過去の台湾文学の評価と、将来の台湾文学の創造にとっても重要な意味を持っており、今後も注目し続ける必要があろう。

翁聖峰は「八四課程標準高中《国文》頼和教材試論」において、頼和の作品分析をしながら、国立編訳館が編纂した「統編本（国定本）」の高校「国文」教科書と、1999年以後に、頼和の作品を掲載した民間五社の高校「国文」教科書とはその内容に大きな違いが見られ、時代の変化により「国文」の教えられ方が大きく変わったことを指摘している⁵⁰。現在までの筆者の調査によれば、他の台湾文学作品に関しても、教科書の解説は指導要領の改訂によって変化しており、本稿で論じた、鄭清文作品の解説をめぐる問題点は、その他の教科書収録の台湾文学作品に共通する問題であると考えられる。さらに、前述の注で示すように、例えば、白先勇の作品について見れば、第一期では6社中2社の出版社が採用しているが、第二期では5社中4社が採用している。小論では本省人作家である鄭清文の作品を中心に論じてきたが、現代台湾文壇を代表する外省人作家である白先勇の作品が第一期から第二期へ移行した時の解釈のされ方の変化の他、第二期に移行してからの、各出版社による解釈の相違点等についても分析を行う必要もあろう。以上の問題についての詳しい分析は、今後の課題としたい。

注

- 1 教育部統計処『中華民國教育統計—民國96年版』(台湾、教育部、2007年) 35頁。
- 2 黄宣範『語言、社会與族群意識—台湾語言社会学的研究』(台湾、文鶴出版、1993年) 123頁。
- 3 台湾語の発音で直接漢字を読む方法のこと。藤井(宮西)久美子『近現代中国における言語政策』(三元社、2003年) 174頁。
- 4 方師鐸『五十年来中国国語運動史』(台湾、国語日報、1996年) 131頁。
- 5 松崎寛子「[作家インタビュー] 鄭清文とその時代、その作品」(『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第8号、2005年4月) 120-121頁。
- 6 教育部『普通高級中学課程暫行綱要』(台湾、教育部、2005年)、556頁。また1952年「中学国文課程標準」の「範文選材原則」の第二項目には、「趣旨が明確で国家政策に合ったもの。(反共抗俄等)」とある。
- 7 同上書。
- 8 1966年の中学から高校への進学者は69.62%。教育部統計処、前掲書、35頁。
- 9 蕭蕭「台湾高中国文教科書の「現代文学」教学内容検討」(『聯合文学』第107期、1993年9月) 10-12頁。彼は当時使用されていた教科書における白話文の文章を次のように整理した。

冊数	作品(作者)	種類	属性
一	永遠與自然同在(蔣經国)	エッセイ	文学
	最後一課(ドーデー著、胡適翻訳)	小説	文学
	故都の回憶(蔣夢麟)	エッセイ	文学
	哲学家皇帝(陳之藩)	エッセイ	文学
	学問之趣味(梁啓超演説稿)	エッセイ	知識
二	写給青年們的一封信(蔣經国)	散文	立志
	早起(梁實秋)	エッセイ	文学
	芸術與人生(吳経熊)	論文	知識
	真善美的新境界(郎静山)	論文	知識
三	翳冷翠山居閒話(徐志摩)	エッセイ	文学
	自述(于右任)	エッセイ	知識
四	師與友(潘希真)	エッセイ	文学
	杜威博士生日演説詞	エッセイ	知識
五	革命哲学(蒋介石演説稿)	エッセイ	知識
	旧文化與新小説(夏濟安)	論文	文学
六	理想的白話文(朱自清)	論文	文学
	詞曲的特質(鄭騫)	論文	知識

- 10 同上論文、13頁。
- 11 莊萬壽「「変」！待变的語文教育—台湾語文教育の新展望」(『国文新天地』第8巻第3期1992年8月) 6-9頁。
- 12 緊箍咒とは、西遊記で、三蔵法師が孫悟空に言うことを聞かせるために唱える呪文、人を服従させるための有効な手段のたとえである。陳萬益は、この文章で国文教科書にとって「課程標準」が“緊箍咒”となっていると批判したのである。
- 13 陳萬益「解除緊箍咒—給国文教学一条活路」(『国文天地』第8巻第1期1992年6月)。
- 14 盧先志「試探洪醒夫短篇小説—<散戲>中人物的象徵意義」(『明道文芸』第241号、1996年4月) 47頁。
- 15 趙公正「解讀高中国文—洪醒夫の<散戲>」(『国文天地』第15巻第6期、1999年11月) 90頁。また同雑誌同号には、鄭遠發「散戲之後論洪醒夫<散戲>之敘事結構任務塑造與象徵」も載せられている。
- 16 阮淑芳「「散戲」一文の章法與文学手法」(『国文天地』第14巻第11期、1999年4月) 84頁。以上掲げた4名は全て当時は現役の高校国文教師たちである。
- 17 他にも、許俊雅が「失去舞台的小人物—談洪醒夫及其小説<散戲>」(『人文及社会学科教学通訊』第10巻第三期、1999年10月、13-23頁)の中で<散戲>が高校教科書第四冊に掲載されたことについて言及している。
- 18 「丢掉那条魚」(『中華日報』1975年8月15日)

- 19 筱玉「不要乱丢「魚」—黄春明作品不能選為國中教材？」（『大学雑誌』第91期、1975年、11月）48～51頁。
- 20 国立編訳館『高級中学国文教師手冊第四冊』（台湾、国立編訳館、1996年）、74頁。
- 21 同上書。
- 22 「410教改大遊行爲下一代而走」（『自立早報』1994年4月10日第5版）。
- 23 1999年後第一期検定教科書において三民、東大、南一、康熙、翰林、龍騰文化各出版社が収録する現代文学の作者は次の通り。（括弧内の数字は、採用した出版社の数を示す）
劉静娟、曾昭旭、鄭愁予（6）、蘇紹連（2）、余秋雨（4）、陳冠学（2）、蕭蕭（2）、愛亜、林雙不、黄永武（2）、陳芳明（2）、簡嬪（6）、朱光潜（4）、洪素麗（2）、傅佩榮（2）、阿盛（4）、周芬伶（2）、琦君（4）、余光中（7）、李魁賢（2）、李碧慧、廖鴻基（2）、夏小舟、鄭宝娟、賴和（5）、王鼎鈞（2）、白先勇、張老師（2）、席慕容（2）、雷驥、陳之藩（2）、吳魯芹（4）、魯迅（4）、白萩（2）、洪醒夫（4）、向明、豐子愷（5）、徐志摩（5）、潘希珍、郭鶴鳴、王邦雄、梁實秋（4）、林文月（2）、楊牧（4）、張曉風（3）、張錯、羅門、龍應台（2）、黄春明（2）、鍾理和（2）、夏曼・藍波安/シャマン・ラボガン、陸蠡、紀弦、向陽、王溢嘉、楊遠（2）、徐仁修、芥川龍之介、馮青、許達然、羅智成、陳列（2）、林耀德、梭羅/ヘンリー・デイビット・ソロー、陳之藩、夏丐尊、郭鶴鴻、陳幸惠、痲弦、胡適（2）、周作人、蕭紅、蔣勳、鄭清文、吳晟、莫那能/モナノン、司馬中原、張繼高、馮至、方思、沈從文。
作品のジャンルは、三民：エッセイ18、現代詩3、小説3、
東大：エッセイ19、現代詩3、小説2、
南一：エッセイ17、現代詩3、小説3、
康熙：エッセイ17、現代詩4、小説3、
翰林：エッセイ15、現代詩5、小説3、
龍騰：エッセイ19、現代詩3、小説4となっている。
- 24 「雨夜花」と台湾意識については、簡上仁『台湾音楽之旅』（台湾、自立晚報、1988年）、莊永明『台湾歌謡追想曲』（台湾、前衛、1994年）、陳芳明『謝雪紅評伝—落土不凋的雨夜花』（台湾、前衛、1991年）に詳しい。
- 25 簡上仁「台湾民俗歌謡的老園丁一周添旺」（『可口月刊』1979年12月）。簡上仁編『台湾音楽之旅』（台湾、自立晚報、1988年）、53頁-58頁。
- 26 杜文清『大家来唱台湾歌』（台湾、台北県立文化中心、1993年）。
- 27 陳芳明『謝雪紅評伝—落土不凋的雨夜花』（台湾、前衛、1991年）、陳芳明、森幹夫訳、志賀勝監修『謝雪紅・野の花は枯れず』（社会評論社、1998年）。
- 28 若林正文『台湾—変容し躊躇するアイデンティティ』（ちくま新書、2002年）129-131頁。
- 29 林翠真「析論當前高中中国文教科書中台湾文学作品の編選及註釈」（『鳥語』第2期2001年6月）。
- 30 同上論文。
- 31 村上嘉英『現代閩南語辞典』天理大学出版部、1981年。
- 32 同上書。
- 33 「作家身影系列講座精彩報導」（『国文新天地』第3期、龍騰文化、2002年）。
- 34 「吳晟談「蕃薯地圖」同上。
- 35 劉四角漢探訪與紀錄「開放與限制—範文編選的時間限制與設計模式的空間限制」（『国文天地』第15卷5期1999年10月）4頁。
- 36 同上論文、7頁。
- 37 2005年後第二期検定教科書において三民、南一、康熙、翰林、龍騰文化各出版社が収録する現代文学の作者は次の通り（括弧内の数字は、採用した出版社の数を示す）。
廖鴻基（2）、徐志摩（5）、洪醒夫（4）、鍾理和（3）、琦君（4）、陳冠学（2）、張曉風（3）、李魁賢（2）、白萩（3）、魯迅（4）、陳之藩（2）、王鼎鈞（2）、梁實秋（4）、簡嬪（5）、鄭愁予（6）、林冷、豐子愷（5）、周芬伶（2）、賴和（3）、阿盛（3）、吳晟（3）、蓉子、陳芳明（3）、林文月（5）、陳之藩、鄭炯明、張愛玲（4）、遼耀東（2）、余光中（5）、夏虹、楊牧（5）、陳列（5）、劉克襄（2）、夏曼・藍波安/シャマンラボガン（2）、瓦歷斯・諾幹/ワリスノカン（2）、向陽（2）、朱天心、歐・亨利/オー・ヘンリー、楊遠、林文義、芥川龍之介（2）、林亨泰（2）、夏宇（2）、蔣勳（2）、林徽音（2）、徐仁修、席慕容、梭羅/ヘンリー・デイビット・ソロー、冰心、余秋雨（2）、柯裕棻、周夢蝶、蘇紹連（2）、黄春明（4）、李黎、泰德・佩瑞/Ted Perry、莊裕安、洪素麗、痲弦、洛夫、白先勇（4）、

鍾怡雯、理查・費曼 / リチャード・P・ファインマン、林海音、張曉風、鄭清文、胡適、蕭紅、何其芳、戴望舒、朱光潛 (2)、亞米契斯 / エドモンド・デ・アミーチス、朱自清、吳濁流、陳義芝、周作人、林凌、商禽、陳黎、龍應台 (2)、唐捐、斯・茨威格 / シュテファン・ツヴァイク、張曉風、林語堂、孫大川、沈從文、泰戈爾 / タゴール、里爾克 / リルケ、楊華。

作品のジャンルは、三民：エッセイ18、現代詩6、小説4、
南一：エッセイ19、現代詩7、小説7、
康熹：エッセイ19、現代詩6、小説4、
翰林：エッセイ21、現代詩7、小説4、
龍騰：エッセイ19、現代詩6、小説7となっている。

- 38 楊子霽「體會冰山下的沈靜與騷動—關於鄭清文小説及現代小説教學的一些想法」(『国文学科中心』第27期、2007年12月)
- 39 搶救國文連盟「讓教育問題回到教育專業上來」(『國文天地』第21卷第2期2001年7月) 78-79頁。陳雅玲「古文教育孔孟教育的式微危機」(『商業周刊』第922期2005年7月) 56-60頁。
- 40 『聯合報』(2007年1月7日)、『自由時報』(2007年11月12日)、『中華日報』(2008年4月10日)。
- 41 林初梅「郷土としての台湾—郷土教育の展開にみるアイデンティティの変容」(東信堂、2009年2月) 199-200頁。
- 42 教育部『新修訂普通高級中學課程綱要』台湾、2008年1月24日。
- 43 教育部・即時新聞『普通高級中學課程發展委員會討論結果』(2008年10月27日)。台湾・教育部ホームページ http://www.edu.tw/news.aspx?news_sn=2150&pages=9、2009年8月21日最終アクセス。
- 44 教育部「普通高級中學國文科課程綱要修訂重點與特色」(台湾、2007年10月12日)。
- 45 同上資料。
- 46 何寄彭「讓國文教育回歸其本質」(『文訊』226期2004年8月) 29-31頁。柯慶明「高中國文課程綱要之擬定」(『文訊』228期2004年10月) 70-73頁。
- 47 藍順德「教科書開放政策的演變與未來發展趨勢」、(『國立編譯館 館刊』31卷、復刊号、3-11、2003年12月) 7頁。
- 48 同上論文、7頁。
- 49 余可柔「百億教科書市場爭霸戰」、(『財訊』第249期、2002年12月)、239頁-249頁。
- 50 翁聖峰「八四課程標準高中《國文》賴和教材試論」、(施懿琳等『彰化文學大論述』台湾、五南圖書、2007年)。